

Marie Clements の *The Edward Curtis Project* における 先住民像の再 - 提示

Re-representation of 'natives' in Marie Clements' *The Edward Curtis Project*

室 淳子

Junko Muro

1. 北米先住民による演劇活動

北米先住民による現代演劇は1980年代後半に注目を集め、それ以降、多くの劇作家の輩出と作品の発表が行われている。近年では先住民演劇に関する研究も進められ、従来にはそれほど注目されなかった初期の演劇家への再評価も行われている。早くには20世紀初頭に北米先住民による現代演劇の走りが見られることも指摘されている (Stanlake 5)。

だが、先住民たちにとっての表現の自由は、多くの場面においては長い間認められてはいなかった。19世紀末から20世紀半ばに至る「インディアン法の修正条項規定」(1885年-1951年)は、劇作家の多くが現代演劇の前身として捉える、ダンスや儀礼における口承伝統を規制するものであり (Lutz 95; Preston 136)、一連の同化政策の下では、公的な場において先住民が演じることは非常に困難であった。

現代演劇の活動が始まるのは、1950年前後であり、主には1960年代から1970年代にかけて、公民権運動の流れを受けたレッド・パワーを訴える動きが高まり、それに伴う形で、実験的な演劇が試みられていく。1948年に、カナダのオンタリオで、Six Nations Forest Theatre が演劇祭を行い、1956年に、ニューヨークで、先住民最初の劇団 American Indian Drama Company

が誕生する。先住民演劇の発展に重要な契機を作ったのは、1969年にサンタフェの The Institute of American Indian Arts (IAIA) において演劇プログラムが開始されたこと、また、1972年に Hanay Geiogamah を中心に Native American Theatre Ensemble (NATE) が設立されたことである。これらの演劇グループは、アーティストたちのネットワーク形成に大きく役立った。その後、1974年に、Native Theatre School がトロントに、Thunderbird Theatre がカンザスの Haskell Indian Nations 大学において誕生する。翌年の1975年には、合衆国の先住民女性を中心に、Spider Woman Theater が作られる。1982年には、トロントに Native Earth Performing Arts が結成され、1984年には、オンタリオ州のマニトゥリン島に De-bah-jeh-muh-jig Theatre が誕生している。¹ もっとも、これらの演劇活動は必ずしも成功を収めるものではなく、多くは資金不足や技術不足による存続の危機に陥りやすく、脚本が評価されても舞台上で日の目を見ることは残念ながら少なかったようだ (Johnson; Lutz 93)。

先住民の演劇が、国内および国際的に注目されるようになったのは、1986年に、カナダ先住民の劇作家 Tomson Highway が舞台監督を務めた *The Rez Sisters* の発表を契機としている。Native Earth Performing Arts の舞台監督に起用された Highway は、少ない資金を下にわずかな聴衆の前で作品を発表したが、批評家たちの高い評価を受け、1988年に発表した *Dry Lips Oughta Move to Kapuskasing* にも国内外の高い評価が与えられた。Highway の成功をきっかけに、連邦政府や州政府の支援を得て、カナダの各地域にあった演劇グループは活動の機会を増やし、1980年代から1990年代を通じて演劇活動全般が活性化した。2000年代に入ると、カナダでの演劇活動はやや落ち着きを見せ、以前ほどに多くの作品が生み出されない現状を指摘する声も挙げられている (Taylor)。

一方、政府の助成が少なく活動が下火であり続けた合衆国においては、演劇活動が次第に注目を集め、カナダとアメリカの国境を越えた形での連携も、近年では多く見られるようになっていく。1994年には、商業ベースに

乗せてイリノイ大学が劇団 Native Voice を誕生させ、1997年には、Native American Women Play Wrights Archive と、カリフォルニア大学ロサンゼルス校の企画によるHOOPが生み出されている。2005年に開館したワシントンD.C.のスミソニアン協会国立アメリカン・インディアン博物館 (NMAI) においても、各種のプロジェクトに加え、演劇プログラム (Native Theater Program) が組まれた。

2. 2人のアーティストと *The Edward Curtis Project*

本稿で取り上げる *The Edward Curtis Project* (2010) は、バンクーバー冬季オリンピックに合わせて行われた文化イベント (2010 Cultural Olympiad および PuSh 国際演劇祭による共催) の一環として企画されたものであり、カナダ・カウンシル、ブリティッシュ・コロンビア州、バンクーバー市、2010 レガシーズ・ナウ、バンクーバー基金による17万5千ドルの支援を受けている。プロジェクトは、北バンクーバーのプレゼンテーション・ハウスのアート・ディレクター Brenda Leadlay の依頼により、3年の準備期間を経て進められた。先住民劇作家の Marie Clements とフォト・ジャーナリストの Rita Leistner が共同制作を行い、2010年1月21日から31日までの10日間、マルチメディアを利用した Clements の舞台が上演され、1月21日から5月23日まで、併設のギャラリーにおいて、Leistner の写真が展示された。

Marie Clements は、1962年に北バンクーバーに生まれ、ラジオ、テレビ、映画などの多岐にわたる創作活動を行っている。前述の Native Earth Performing Arts や De-bah-jeh-muh-jig Theatre などの劇団で演劇活動に携わった後、2001年に、劇団 Urban Ink Productions を自ら創設した。これまでに10作を超える演劇作品を発表し、バンクーバーのスラム街において複数の先住民女性が殺害された事件や、第二次世界大戦時に北西準州の先住民デネーのコミュニティーにおいて行われたウラニウム鉱開発など、自らのメティスやデネーのアイデンティティに関連した社会的なテーマを扱った作品を多く描いている。

Marie Clements は、*The Edward Curtis Project* を制作するにあたり、イラクやレバノンを中心に撮影を行っていた Rita Leistner の腕を評価し、協力を求めた。二人は、19世紀末に北米大陸全土にわたって先住民の姿をカメラに収めた Edward Curtis の足跡を辿り、カナダ北西準州、ブリティッシュ・コロンビア州ハイダ・グワイ（クイーン・シャーロット諸島）、バンクーバー市内東部、合衆国のアリゾナ州、オクラホマ州の5つの先住民コミュニティを訪れて、撮影、インタビュー、ワークショップを行った。

Edward Curtis による「消えゆく種族」としての「インディアン」の記録を、現代の視点から捉え直す二人の「表象 = 再 - 提示 (re-presentation)」の試みを以下に考察していきたい。

3. Edward Curtis と批評

1891年から写真家として活躍し始めた Edward Curtis は、1890年代の後半より北米大陸を縦断する形で先住民の姿を写真や映像に映し出し、4万枚のネガを費やして、20巻に及ぶ写真集『北米インディアン (*The North American Indian*)』を出版した。Curtis の試みは、多額の資金に支えられた国家的なプロジェクトであり、1907年に出版された第1巻にはルーズベルト大統領の序文が寄せられている。200人の死者を超える犠牲を生んだ1890年のウーンデッド・ニーの虐殺により、「インディアン」の征服が完了したと一般的には捉えられてきたが、西洋文化社会への同化政策が進められる一方で、「純粋な」文化が失われてしまう前に「消えゆく種族」を記録に残すという Curtis の行為には、同時代の共感を得たようだ。同じ時代に「消すことを望む」暴力と「消えることを惜しむ」心情があったことは皮肉だが、いずれも先住民が「消えゆく」ことを容認する流れに逆らうものではなかったことに変わりはない。

伊藤俊治は、Edward Curtis の記録のスタイルとして、光の特殊な使い方により写されたものにある特別な価値を付与しようとしていることを挙げ、「時間が停止してしまったような、時間と空間が融合されたような、そこだけ

別の形式で自立しているような世界のあり様をその中で表出している」(伊藤 49) ことを述べるが、「消えゆく」ものに対し、イメージで立ち向かうことで存在を与え続けようとする試みが、Curtis が活躍した時代の写真には見受けられるようだ。

Edward Curtis が残した数多くの写真に対して、研究者たちの見解は分かれ、現代の先住民の立場からも両義的な価値を見出す声がある。Curtis の写真は、北米社会における「インディアン」イメージを形成する原型として人々の意識の中に定着し、ハリウッドの西部劇に登場する「インディアン」の描写にも投影され、アメリカ南西部の観光ブームやニュー・エイジ運動においても、Curtis の写真をプリントした絵葉書や T シャツがもてはやされた。

先住民批評家の Gerald Vizenor にとっては、Curtis の写真の中で羽根飾りやビーズ、皮、織物、銀細工、トルコ石といった衣装をわざわざ身に着けている先住民は、モノとして客体化されたシミュレーションとしての「インディアン (indian)」であるに過ぎない。多くは男性の険しい表情を写した写真には、家族や子供たちの姿は見られず、ユーモアのある状況で写されることも稀である。これらの写真には、「先住民たち (natives)」の物語が欠落し、先住民たちの知恵も現実性も写し出すものではないと、Vizenor は批判している。Curtis の写真からは、傘やサスペンダーなどの文明の手がかりとなるものも文字の痕跡も取り除かれているが、19世紀終わりの時代にあって実際にはすでに多くの先住民が教育を受け、Curtis が衣装とカメラを持って訪れた土地においても先住民が教師として働いていた状況を鑑みれば、そのような表象行為は非常に残念であると、Vizenor は述べている。写真の中でカメラを見つめる先住民本人の目と、皺の刻まれた手にのみ、先住民の物語を読み取ることができると、Vizenor は議論を展開している (Vizenor 145-165)。

いくつかの評論は、Edward Curtis の写真に対するホピ (伊藤 51) やコマンチ (Clements 73)、クワクワカクウ (Griffin) の人たちの見解を取り上げている。Curtis の写真が、西洋人の美学において凍結され、理想化されたものであるとする数多くの批判にも関わらず、それらの写真の存在は、偶然

にも写された祖父たちの姿を見出し、祖先の歴史や過去を知る重要な手立てでもあるとする見解である。*The Edward Curtis Project* の発表に際し、Marie Clements 自身も、Curtis を一刀両断に批判はしておらず、多くの批判にもかかわらず、Curtis の不断の努力と献身には一定の評価を与え、「不正確」であったとしても、多くの場合においては、唯一残された先住民の歴史の記録であることを認めている (Clements 10)。

4. Rita Leistner による現代の先住民像の再 - 提示

Edward Curtis の撮影が、北米先住民全体を対象とする一大プロジェクトであったことに対し、*The Edward Curtis Project* では、Curtis 自身がプロジェクトの対象として位置づけられ、演劇と写真撮影を通して、彼が残した遺産を捉えなおす試みが行われる。Curtis の旅のいくつかを辿って訪れた地で Rita Leistner が写した写真の数々は、Curtis の写真から排除されたもの、あるいは、写されることのなかったものを積極的に写していく。

例えば、現代の生活を明らかにさせるような、車、自転車、テレビ、ミニ・マウス、英語の文字の入った箱、アメリカの国旗、西洋式のキッチン、リビングルームなどは、当然のものとして写し出されていく。また、同じ人物が、伝統的な衣装を着る姿と日常的な T シャツやジーンズを着る姿を並べ、彼／彼女らが持つ文化的な複合性を同時に映し出す (資料1)。あるいはまた、撮影の被写体のみが対象になるのではなく、カメラを持つ撮影者や撮影隊、撮影前後の人の姿、写真展において自らの写真を見る当人の姿など、1枚の写真の撮影をめぐり、その外側の情景も同時に写す。Rita Leistner はまた、戦争帰還兵たちの姿、先住民女性が犠牲となったバンクーバー東部の街角、貧困の様子、老いの姿、ドメスティック・バイオレンスから救済された女性の写真など、先住民の現在に内在する社会的な側面も一連の写真の中に含めていくが、それは、Edward Curtis が目にしてははずの先住民の社会的な窮地を表すものを写真の中にほとんど投影しなかったことへのアンチテーゼとしても提示されるのだ。

Edward Curtis の写真が、白黒あるいはセピア色の中で芸術性を帯び、被写体の個性を失わせ、先住民全体を表象するかのよう一般化されているのに対し、Rita Leistner が写した写真の数々は、色彩を持ち、被写体の個性と多様性、雑多な日常性と現実性を感じさせるものであるのは興味深い。



(資料1)

(出典：Marie Clements, *The Edward Curtis Project* 19; 27)

5. Marie Clements による現代の先住民像の再 - 提示

Marie Clements の舞台においても、Edward Curtis の写真や撮影の行為を再び捉え直すような試みが随所に見られる。Clements は、それまでの舞台において、日常では起こりえないような、異なる時間や空間にいる人物同士の対話を可能にさせ、過去の歴史的な人物と劇中の登場人物とを重ね合わせるような試みをしばしば行っている。*The Edward Curtis Project* の舞台においても、主人公の Angeline とボーイフレンドの Yiska は、Curtis 役の人物と直接対話を行う。また、Curtis の最初の被写体であったと言われる Princess Angeline と主人公の Angeline、Curtis の通訳を務めたと言われる Alexander Upshaw と Yiska、Curtis の妻であった Clara と Angeline の姉の Dr. Clara を同一のキャストによって演じさせ、名前を重ね合わせることで共通性を浮き彫りにし、Curtis と関わりをもった人たちの声を代弁させる試みをする。

物語は、ジャーナリストの Angeline が、カナダ北西準州において遭遇した先住民の子どもたちの死について報道し、賞を与えられたことをきっかけに思い悩む場面から始まる。舞台上の透明のスクリーンには、Angeline の家族の写真が写され、Edward Curtis が撮影した写真に説明書きを加えたのと同じように、Angeline 自ら、自分の家族に対して説明書きを加えていく。度重なるシャッターの音を立ててフラッシュが焚かれると、四角いフレームが家族の写真を囲み、Angeline 自身も写真の枠の中に身を置く。しかし、その写真の枠の居心地の悪さから逃れようと、Angeline は必死にもがく。彼女は、自分自身を定義づけるのにふさわしい説明書きとして、姉から贈られた Curtis の写真集のタイトルでもある「消えゆくインディアン (“The Vanishing Indian”）」という言葉を選ぶのだ。

舞台上の人物がフレームの中に入って写真と化し、また写真から抜け出して動き出すという一連の動きは、舞台を通じて繰り返される。動きのある人物が写真として固定化されることで、声を失い、客体化される——それはすなわち、歴史の中で先住民に対して繰り返し行われた表象の行為を舞台の上に再現するものである。舞台では、写真の中の人物を再び動かしてみせるこ

とで、客体化された先住民をひとりの人物として、生の声と動きを取り戻させようとするのだ。

これまでの歴史の中で行われた先住民を表象する行為に対する問題提議は、撮影をする行為に対してばかりではなく、説明書きをつけること、名づけること、書いて記録に残すことに対しても行われる。舞台の上で Edward Curtis と会話を交わし始めた Angeline は、自分のあだ名を Chief だと語る Curtis が、Angeline に対しては一方的に名前をつけ、説明を加えようとすることを咎める。Angeline は、Curtis がつけようとした名称を消し、自分自身を説明する言葉を自ら書きこんでみせる：

CHIEF: I'm going to call you/

SLIDE CAPTION: "Primitive Indian Wom ..."

ANGELINE: /Aren't you going [sic.] ask me what I call myself?

CHIEF: I wasn't going to ... but if you think it's important.

ANGELINE: I do ... I do.

She takes his journal and pen, crosses out the "Primitive Indian Wom..." and writes.

SLIDE CAPTION: "Most Beautiful Woman You've Ever Met."

(Clements 20)

舞台の上では、「消えゆく」という表現に、Edward Curtis の時代に用いられた形容からは故意にずらした意味がかぶせられて用いられる。Angeline が自らを「消えゆくインディアン」と名づける際に用いる「消えゆく」という表現は、Curtis の写真集のタイトルに与えられた客観的かつある種ロマンティックな意味合いは帯びない。むしろ、先住民の混血女性として Angeline 個人が感じる現実での生きにくさや、自己存在の不安定さを表すものに変えられる。Angeline の視点は、「消えゆく」という表現が本来持ちうるはずの暴力性を明らかにする。舞台では、Curtis の時代の先住民と、Angeline を代表

とする現在の先住民とがともに抱えてきた困難さを描き出し、「消えゆく」ことにロマンティックな幻想が微塵も働きえないことを示そうとする。かつての写真の中から抜け出し、自らの言葉を声にする先住民は、極めて現実的かつ切実である。Curtisの最初の被写体になったと言われる Princess Angeline は、空腹を凌ごうと蛤を探して砂浜をさまよひ、食べ物を求めて写真の撮影を許可する。通訳の Alexandar Upshaw は、通訳の代価として1ドルを要求する。そして、Curtis 自らも訪れた先住民の土地土地で料理の腕をふるい、多くの無名の「インディアン」たちは空腹を訴える声を響かせる。舞台の上での Curtis は次のように語る：

... I cooked for them, and I cooked for them, and I cooked for them...do you want to know why? Because I couldn't stand watching them starve to death over and over and over ... everywhere I went ... starvation, death, incarceration, hunger ... They were so hungry I would cook for them every chance I got ... every goddamn chance I got ... Goddamn it! Goddamn, Goddamn it to hell!

(Clements 54)

写真集の中には、時間と動きを凍結させた多くの先住民の姿が残されている。舞台の上では、Angeline がジャーナリストとして報道したとされる、北西準州の町で雪の上に文字通りに凍結して横たわる3人の子どもの姿が最後に提示される。泥酔した父親による過失であるとする事実のみの報道をすることしかできない Angeline は、窮状に瀕する先住民の声を拾い上げることができない。現在に続く生存の困難さと表象の困難さは、Angeline の意識を苛むばかりである。

6. おわりに

The Edward Curtis Project は、Edward Curtis と彼が残した写真に対して、現代のアーティストたちが行った実験的な再解釈と再-提示の試みであると

いえるだろう。現代の先住民たちの鮮やかな写真の数々や、舞台の上に繰り広げられる先住民俳優たちの動きや声は、現実的な困難さを描きながらも、現在に続く先住民たちの色濃い生存を写すものでもあるだろう。

先住民の問題を扱うに当たり、表象をめぐる問題は度々取り上げられる。あるいは陳腐なものであると捉えられる向きもあるのかもしれない。それにもかかわらず、先住民による文芸活動全般に、表象の問題が繰り返し描かれ続けていることには、先住民に対するステレオタイプのイメージの広範さや根深さ、不理解が一方に残されているからであるといえるだろう。表象される側に置かれ続けた先住民が、自ら表象する立場に身を置き、自らの身体を通じて伝える、動き、声、笑い、叫び、情感、日々の経験とその物語は、かつての肖像写真に対置され、あるいは並置されることで、表象の行為自体を問題視し、新たな姿を再 - 提示していく可能性を持つものだといえるだろう。

注

- i 先住民の演劇活動と時を同じくして、1967年にウクライナ系カナダ人の George Ryga が発表した *The Ecstasy of Rita Joe* も、同時代の都市に生きる先住民を描いたことで人々の注目を集めた。

引用文献

- Clements, Marie and Rita Leistner. *The Edward Curtis Project: A Modern Picture Story*. Vancouver: Talon, 2010.
- Griffin, Kevin. "Play Explores Themes of Cultural Identity through Story of Controversial Photographer." *The Vancouver Sun*. Jan. 21, 2010. 14.
- Gulbrandsen, Don. *Edward Sheriff Curtis: Visions of the First Americans*. Edison, NJ: Chartwell, 2006.
- Harris, Michael. "An Intervention into Native Identity Leads to More Questions." *The Globe and Mail*. Toronto, Ont.: January 25, 2010. 5.
- 伊藤俊治、今福龍太、宇野邦一、中沢新一、港千尋「映像人類学の可能性」『映像人類学の

冒険』せりか書房 1999年

Lutz, Hartmut. *Contemporary Challenges: Conversations with Canadian Native Authors*. Saskatoon: Fifth House, 1991.

McFee, Erin. "New Project Turns the Tables on History; Presentation House Team Focus on Famous Images of Edward S. Curtis." *North Shore News*. August 31, 2007. 18.

Preston, Jennifer. "Weesageechak Begins to Dance: Native Earth Performing Arts Inc." *The Drama Review* 36.1 (T 133) (1992).

Stanlake, Christy. *Native American Drama: A Critical Perspective*. Cambridge: Cambridge UP, 2009.

Taylor, Drew Hayden. "Native Theatre's Curtain Call: Twenty Years Later, the Medium is Set for a New Stage." *This Magazine* (2007) Online. <http://www.thismagazine.ca/issues/2007/01/nativetheatre.php>.

Vizenor, Gerald. *Fugitive Poses: Native American Scenes of Absence and Presence*. Lincoln: U of Nebraska P, 1998.